

インターネットを利用した 日本語読解支援システム

——内容中心の学習を目指して——

西 谷 ま り

1 はじめに

留学生、ビジネスマン、技術研修生、外国人労働者といった日本語学習者の多様性とその対応策についてはこれまでも盛んに論じられてきた。しかし、現在では留学生という一つのグループの中でも、理系文系の違いにとどまらず、来学時の日本語力、留学目的、留学形態、留学期間等は以前に増して広がりを見せている。このように多様な状況下にある留学生のニーズに応え、彼らが必要とする日本語力を獲得させるためには、これまで以上に、留学生の専門や興味を生かした内容中心の日本語教育が求められるだろう。

そのための一方策として、本論ではインターネットで利用できる日本語読解支援システムである Dictionary Link System を利用した自律的日本語読解学習方法を紹介する。Dictionary Link System (Dictionary Linked System と呼ぶこともある。以下 DL と呼ぶ) は日本語の文章中の語彙を辞書情報とリンクさせたハイパーテキストを自動的に生成するシステムである。北陸先端大学の落水浩一郎、寺朱美、北村達也氏(現在は静岡大学情報学部)によって考案され、実用化された。このシステムを利用することにより、日本語の文章を読むに際して、学習者は辞書をひく手間を省くことができる。

今回は、一橋大学の留学生に DL を紹介し、DL を利用した自律的日本語読解学習が成立する条件、DL を利用した場合の学習者の読解に対する態度変容に関する調査を行った。この調査に基づいて、DL を利用した内容中心の自律的日本語学習の効果的導入方法を考えてみたい。

2 一橋大学の留学生

一橋大学には現在約380名の外国人留学生在籍している。留学生は大学への所属形態によって、学部・大学院の正規学生、学部・大学院の交流学生¹⁾、日本語日本文化研修生²⁾、大学院の研究留学生、日本語研修生³⁾、そして、数は少ないが聴講生に分類される。来学時の日本語力、留学目的・期間、さらには習得すべき日本語のレベルという点からそれぞれのグループについて考えてみたい。

まず、約100名の学部正規留学生は文部省の奨学金を受給している国費留学生と私費留学生がほぼ半数ずつである。前者は東京外国語大学および大阪外国語大学における1年間の集中日本語教育を経て入学し、多くは上級レベルの日本語力を有する。後者は民間の日本語学校において、1年～2年の日本語学習を経ており、全員が上級レベルの日本語力を有する。私費留学生は(財)日本国際教育協会と国際交流基金が実施する日本語能力試験で、1級330点以上という高得点をあげている。これら学部正規留学生には入学時点では日本人学生と同じ講義を受けて試験に合格する日本語力、最終的には日本語で卒業論文を書き上げるまでの日本語力が要求される。(日本語能力試験の判定基準は資料1を参照のこと)

交流学生は留学期間が1年間で、1998年6月現在約20名在籍している。多くは学部に、一部は大学院に所属している。一橋大学では現在ほとんどの講義が日本語で行われているため、日本語能力試験2級合格以上を基本的な受け入れ条件としているが⁴⁾、交流学生は日本語力で2つのグループに分かれ、2級合格レベルに満たないものも来学している(一橋大学留学生センター1997)。これらの学生はゼミナールの受講以外は日本語教育科目の受講、つまり日本語の学習が留学目的となることが多いが、一部の交流協定校は別として、派遣元の大学から帰国時の日本語の到達度を問われることはない。

各年度4名程度ずつ受け入れている日本語日本文化研修生も、留学期間が1年間であるという点は交流学生と同様であるが、専門が「日本語」または

「日本学」であり、母国における選抜段階で一定の日本語力を要求されるため、日本語力も日本語学習意欲も高い。留学目的は日本語力のレベルアップ及び日本文学など日本学関係の専門を深めることである。

在籍者50余名の大学院研究留学生には2つのタイプがある。資料収集のために1年間または2年間、一橋大学に在籍した後母国の大学院に戻る場合と、研究生期間終了後、大学院の正規学生として修士課程に進学することを目的としている場合とがある。前者のタイプの研究留学生は日本滞在期間が短く、留学の主目的が資料収集等であるため、日本語学習に費やすことのできる時間は限られている。また、資料収集と一口にいっても、日本語の文献を読みこなしたり、日本人に対して日本語で面接調査を行わなければならないと、といった場合には日本語力が必須だが、ほとんど英語で用が足りてしまう場合もあり、日本語の必要度は様々である。一方、正規課程への入学を目指している場合、研究科によって日本語力の要求レベルは異なるが、いずれにせよ入学試験の語学および専門の試験に合格するための日本語力を身につけなければならない。

大学院正規生は修士課程、博士課程ともに約100名ずつの留学生が在籍している。課程を修了するためには、日本人学生と同様に単位を取得し、修士論文、博士論文を書きあげなければならない。ただし、修士論文については日本語で書くことが基本であるが、経済学研究科や法学研究科の一部で論文を英語で書くことが認められている他、一部の専門領域では一定の英語力と専門能力を有していれば、日本語力はさほど高くなくても専門科目の単位を取得することができる場合もある。

3 自律学習とCALL

2節で見てきたように、一橋大学における留学生の来学時の日本語力、日本語学習の到達目標は多様である。これらの学生の専門や興味を生かした内容中心の日本語教育を考えた場合、適切な学習素材は多岐にわたる。学習者中心主義の言語教育の立場からも、教師が教材・学習方法を決めて与える一

斉学習・一律教材だけでなく、学習者が自分で学習する内容を決定し、学習を遂行し、評価していく自律的学習の導入が考えられてよい。そして、学習者の自律的学習を援助し、促進するための有効な手段としてコンピュータの利用が考えられる。

CALL (Computer-Assisted Language Learning) はコンピュータを利用した語学学習の方法であり、文法や漢字のドリル、読解練習のツールとして既に多くの日本語教育機関でカリキュラムの一部に取り入れられている⁵⁾。これまでのCALLは、学習のために設計されたドリルなどが中心であったが⁶⁾、1990年代に入りインターネットの急速な普及によってCALLの新たな可能性が高まった⁷⁾。

あらかじめ設計されたCALL教材では、個別学習はできるが、学習者の自律性には制限があった。読解練習にしても教室における斉学習と比較すれば、選択の幅はあるものの、本当に自分の読みたい素材を選ぶことはできなかったが、インターネット上でDictionary Link Systemを利用すれば、学習者は完全に自律的に読解素材を選択することが可能となる。DLは1節で述べたように、日本語の文章中の語彙を辞書情報とリンクさせたハイパーテキストを自動的に生成するシステムである。どのような素材でも扱うことが可能であるが、例えば新聞社のホームページから記事をコピーしてDLにのせれば、辞書をひかなくても容易に新聞を読むことができる。

「辞書をひかずに読める」ということはどういう意味をもつのだろうか。ある言葉の漢字の読み方がわからない場合、偏と画数がわかれば辞書をひくことができるが、この作業は正しい手順で行っても時間がかかるだけでなく、画数を間違えれば文字は見つからない。DLを使えばこれらの手間が省けるわけであるから、読解にかかる時間は大幅に短縮できるはずである。

DLは開発された当初、UNIX上でしか作動しなかったが、1997年にはホームページ上から利用できるようになったため、インターネットに接続しているコンピュータがあればどんな機種からでも利用できるようになった。

本格的な導入に先立ち、まず1997年11月から1998年2月にかけて、DL

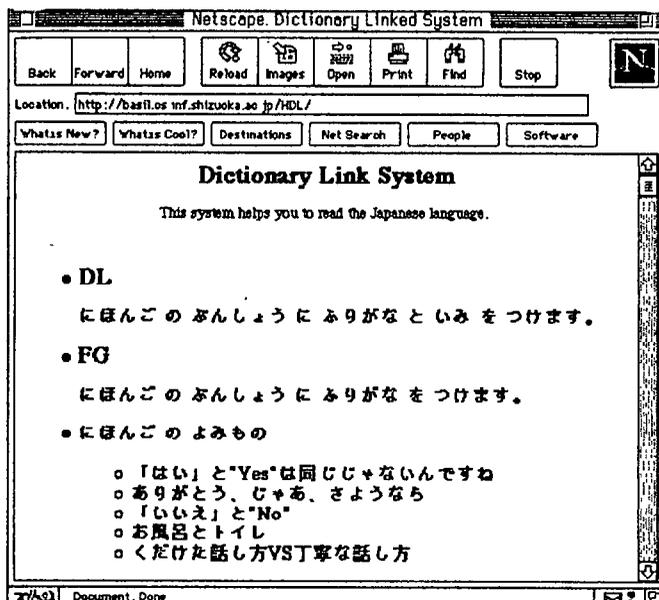
の実験的な導入と調査を試みた。DLの開発者の一人である北村達也氏によって一橋大学の学生がDLを利用するための専用のホームページが作られた。静岡大学工学部10名、一橋大学8名、合計18名を対象にDLを紹介し、利用状況の把握とDLを利用する際の問題点等に関するアンケート調査を行った。その結果、DLを1度以上利用したのは、18名中、静岡大学・一橋大学各4名の合計8名であったが、利用し続けたのは静岡大学2名、一橋大学1名のみだった。DLを使わなかった、あるいは使い続けなかった理由は、「自由に使えるコンピュータがない」という答えが両大学ともに4名である。静岡大学では学生は研究室のコンピュータを利用することができるが、一橋大学では学生はパソコンルームおよび情報処理センターを利用している⁸⁾。DLを利用しにくい他の理由は「使い方がよくわからない」ことで、静岡大学1名、一橋大学2名から指摘をうけた。この点を改善するために、5つの新聞社の了解を得てDLから新聞社のホームページにリンクをはった他、使い方が簡単にわかる紹介文を作成した。

DLの利用方法は図1から図3に示した。もちろん、リンクをはっている新聞社の記事でなくても、コンピュータで読めるテキストタイプのものであれば同様の手順で読むことができる。スキャナーを使用して、自分の読みたい論文の読解に利用することも、ホームページやEメールの読解に利用することも可能である。実際、静岡大学では大学のホームページや日本人からくるEメールの読解にDLが頻繁に利用されていた。

4 Dictionary Link System が利用される条件

本格的なDLの紹介は1998年3月の春の日本語集中コース⁹⁾の中の「上級経済クラス」を皮切りに、1998年4月から5月初めにかけて、筆者が担当する「経済の日本語」と他の教官が担当する学部の留学生のための「日本語A」「社会科学ゼミナール」を中心に行った。DLの紹介時に同時に調査票を配り、日本語読解に対する態度等を調べた。2週間〜1か月後に再度調査票を配り、DLの利用その他について質問した。実際にコンピュータを使

図 1-1



まずDLにアクセスすると、

図1-1、図1-2の画面が現われる。

図 1-2

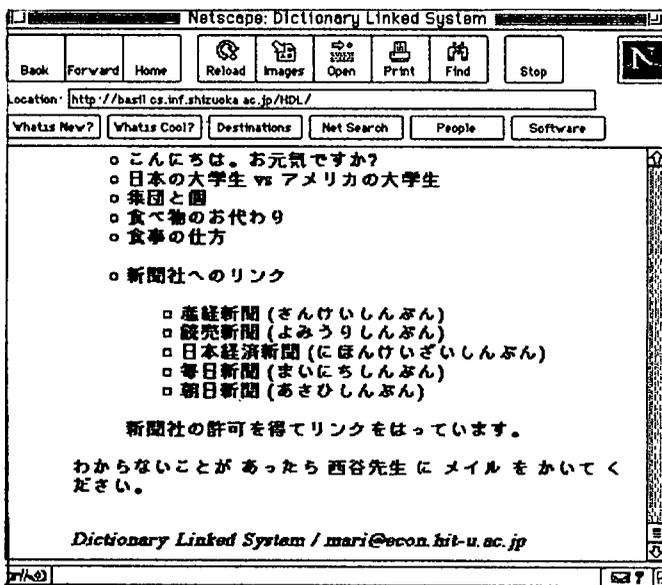
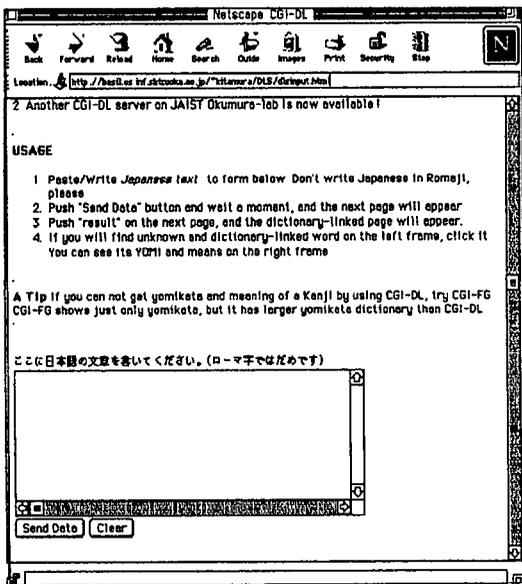
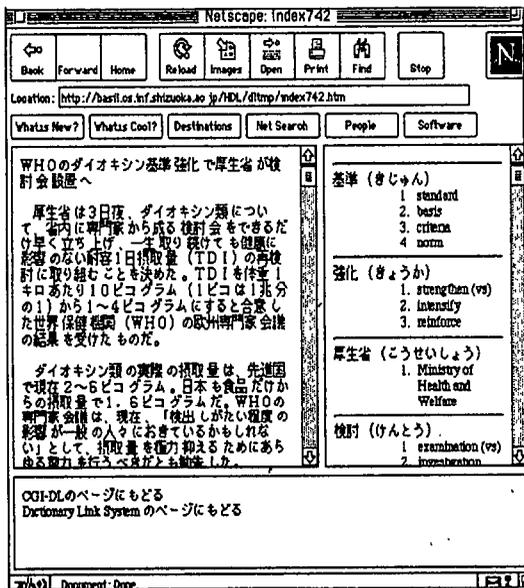


図2



読みたい記事をコピーしてDL画面に戻って「DL」をクリックすると、この画面になるので、四角の中にさきほどコピーしておいた記事をペーストし、send dataをクリックする。

図3



静岡大学のサーバーにつながり、処理が終わるとResultという字が表示されるので、それをクリックすると、左側に記事、右側に辞書が表示される。記事の中のわからない言葉をクリックするとその単語が右側の画面の一番上に表示される仕組みになっている。

って筆者が使い方を説明したのは3月の「上級経済クラス」の学生（紹介したのは5名だが調査を完了したのは2名）と筆者が個人的に紹介した日本語「中級・前」¹⁰⁾レベルの学生3名に対してのみで、「経済の日本語」と「日本語A」ではDL紹介文のハンドアウトを配って、筆者自身がDLの紹介と事前事後調査を行い、「社会科学ゼミナール」では他の教官にハンドアウトの配布と事前事後調査を依頼した。

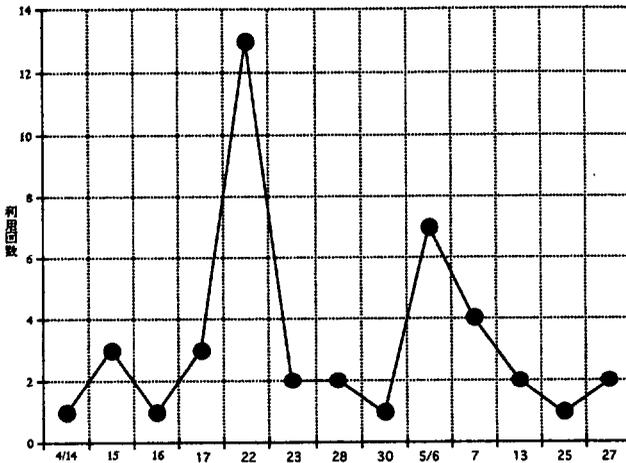
事前調査の項目は、日本語による読解が好きか・得意か、漢字の意味や読み方がわからなくて困ることがあるか、日本語の新聞・雑誌を読んでいるか、日本語で読みたいものが読めるか、日本語の文章が読めるようになりたいか、日本語の文章が読めるようになると思うか、自分の日本語レベルより難しいものを読もうとすることがあるかといった読解そのものに関する質問に加え、日常のコンピュータの使用頻度、自律学習経験等である。事後調査の項目はDLの利用回数を聞き、利用した場合に文章理解が進んだか、日本語の新聞・雑誌を読む回数が増えたか、DLを使った読解は楽しいか、自分の日本語レベルより難しいものに挑戦するようになったか、DLを使用する際の問題点は何か等である。DLを紹介した学生は50名以上になるが、事前事後の調査を完了した学生は合計44名で、学生の内訳は以下の通りである。

1) 漢字圏か	: 漢字圏 (22), 非漢字圏 (22)
2) 身分	: 学部1, 2年生 (20), 交流学生 (7), 大学院修士課程 (2), 研究生 (14), 聴講生 (1)
3) 日本語レベル	: 上級・後 (18), 上級・前 (13), 中級・後 (5), 中級・中 (5), 中級・前 (3)
4) 性別	: 女性 (20), 男性 (24)

DLは全世界から利用できるが、前述したように一橋大学用には特別にホームページが作られている。専用アドレスにアクセスした回数を自動的にカウントした結果をまとめたものが図4である。

DLを紹介した直後には利用が増え、その後急激に減っている。DLの利用状況と学生の属性との関係をクロス集計し、 χ^2 分析を用いて分析した結

図4 1998年4月～5月のDL利用回数



果を以下にまとめる。有意な差が見られたのは、漢字圏・非漢字圏の区別、日本語レベル、性別のみで、年齢、身分、学部、読解に関する自律的態度(「日本語の教科書より自分の読みたいものを読むほうが意欲が湧くか」という質問で測定)によるDL利用度の差異は見られなかった。興味深いことは、通常のコンピュータの利用頻度とDLの利用に有意な関係は見られなかったことである。

まず、漢字圏と非漢字圏でDLの利用度の違いが顕著に見られた。(表1)当然のことながら、非漢字圏出身の学生は、漢字の読みと意味がわからなくて困難を感じる度合いが高い($\chi^2=11.02$ $p<0.001$)。前節で述べたように、漢字の読み方がわからなければ辞書をひくのが難しいために、辞書をひかずにすむDLは便利な道具である。寺(1998)は、DLを利用した時と、紙の上での読解した時とで、読解速度と理解の違いがあるかについて実験を行って、「DLは非漢字圏の学習者に対してかなり有効である」という結果を得ている。なお、同実験では韓国を漢字圏に分類せず、漢字圏・非漢字圏・韓国の3つの分類で比較しているが、今回の調査対象の韓国人学生はプレイス

表1 非漢字圏とDLの利用

漢字・非漢字 DLを利用したか	非漢字圏	漢字圏	合計
利用した	13	5	18
利用しなかった	9	17	26
合計	22	22	44

$$\chi^2=7.2 \quad (p<0.01)$$

表2 日本語レベルとDLの利用

日本語レベル DLを利用したか	中級, 上級・前	上級・後	合計
利用した	13	5	18
利用しなかった	13	13	26
合計	26	18	44

$$\chi^2=2.17 \quad (p<0.20)$$

表3 性別とDLの利用

性別 DLを利用したか	女性	男性	合計
利用した	11	7	18
利用しなかった	9	17	26
合計	20	24	44

$$\chi^2=3.21 \quad (p<0.10)$$

メントテストの結果、全員漢字力が高かったので、漢字圏に分類してある。

次に日本語レベルとDL利用について調べた。(表2)一橋大学のクラス分けでは「中級・中」から「上級・前」までの3クラスは日本語能力試験2級を、「上級・後」は1級を基準にしていること、また、実際「上級・後」に分類した学生の中には日本語能力試験1級で高得点をあげている学生も多数含まれているため、「上級・前」と「上級・後」の学生間にかなりのレベルの相違があると考えられる。そのため、中級の3レベルと「上級・前」の合計4レベルを1つのグループにまとめ、「上級・後」レベルと比較した。中級と「上級・前」の学生26人のうち非漢字圏出身者が17人である。2つ

のグループのDL利用には大きな差は見られない($\chi^2=2.17$ $p<0.20$)が、日本語のレベルの高い学生より、日本語レベルの低い学生に使われている傾向は見て取れる。

今回の調査では、DLの利用度が高いのは漢字圏より非漢字圏の学生、日本語習得レベルが日本語能力試験1級合格レベルには至っていない中級から上級の前半程度の学生、そして男性よりも女性であるという結果がでている。

次にDLを利用したのが1度、2度の学生と3度以上利用した学生の特性の違いを調べるために、DLを利用した18人の学生のうち、3度以上自発的にDLにアクセスしている学生6人について表4にまとめた。

表4 DLの利用度が高い学生

属性等 番号	身 分	回数	性別	漢字圏か	日本語 レベル	利用の目的
1	研 究 生	5	女	非漢字	上級・前	日本語の勉強
2	研 究 生	4	男	非漢字	中級・中	日本語の勉強
3	研 究 生	4	女	非漢字	中級・後	読みたい記事を読む
4	聴 講 生	3	女	漢 字	上級・前	日本語の勉強
5	研 究 生	3	女	漢 字	中級・後	日本語の勉強
6	学部1年生	3	女	非漢字	上級・前	読みたい記事を読む

DLの継続利用度が高いのは、全体の利用傾向と同様に、女性と非漢字圏の学生である。日本語レベルは中級3人、上級3人であるが、「上級・後」レベルの学生、「中級・前」レベルの学生はいない。1番と2番の学生は東南アジア、3番と6番の学生はヨーロッパ、4番と5番の学生は台湾の出身である。1番から5番までの学生は現在、1999年度の大学院修士課程入学を目指して勉強中である。「コンピュータは好きですか」という質問に対しては、6人とも「はい」または「どちらかといえばはい」と答え、週平均コンピュータ利用時間は7.5時間である。さらに、4番以外の学生は事前調査では「日本語の雑誌をよく読みますか」という質問に3人は「いいえ」、1人は「どちらかといえばいいえ」と答えていることから、新聞・雑誌に対する

接触度は低い学生たちであることがわかった。

5 読解に対する態度変容

次にDLを利用した18人がDLをどのように評価しているか、読解に対する態度に変容があるかについて見てみることにする。態度変容について詳細な回答があったのはDLを利用した18人中15人である。

まず、事前調査で「日本語の新聞・雑誌をよく読むか」という質問に「いいえ」「どちらかといえばいいえ」と答えた13人のうち9人(8人は非漢字圏出身者)が、事後調査では「DLを使うようになって新聞・雑誌を読む回数が増えた」と答えている。(図5)

次に、「日本語の新聞や雑誌が理解できるか」について、事前調査では「どちらかといえばいいえ」と答えた9人のうち8人が「DLを使うとよく理解できるか」という質問に「はい」または「どちらかといえばはい」と答えている(図6)。

さらに、「自分の日本語レベルより上の読み物に挑戦することがあるか」という質問に事前調査では「どちらかといえばはい」と答えた10人中7人が、事後調査では「はい」と答えている(図7)。

また、「教師に教材を決められるより自分の興味のあるものを勉強したいか」という質問に対して、事前調査では「はい」または「どちらかといえばはい」と答えたのは11人から17人に増えている。(図8)

DLを使うことによって、日本語の文章がよく理解できるようになったと感じ、難しいものに挑戦したいと感じるようになったということは、すなわち日本語読解に関する自信を深めていると考えることができる。桜井(1997)は、内発的な学習意欲を支えるものとして、「有能感(自分はやろうと思えば勉強ができるんだ!という気持ち)」「自己決定感(自分のことは自分で決めているんだという気持ち)」「他者受容感(自分はまわりの人から受容されているんだという気持ち)」という3つの要素をあげている。

日本語レベルのまだあまり高くない非漢字圏の学生にとって、読解の障害

図5

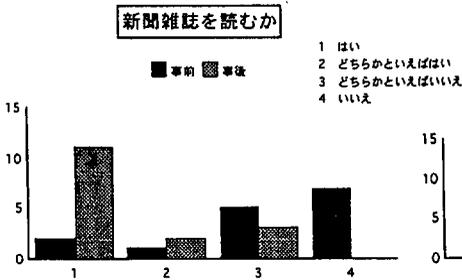


図6

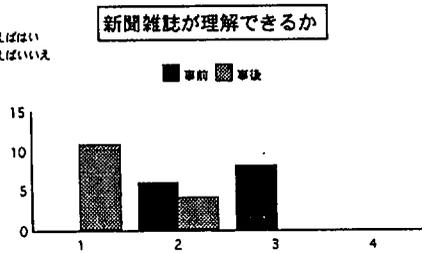


図7

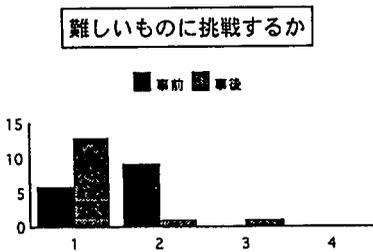
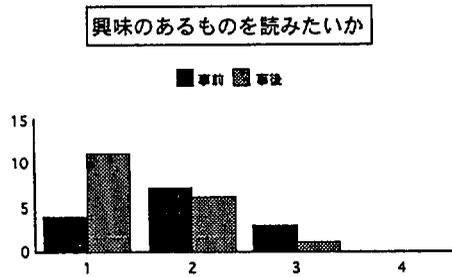


図8



となるのは漢字である。読み方がわからなければ、辞書をひくにもかなりの時間がかかるため、読解に対して抵抗感をもつ場合が多い。事前調査で「日本語の新聞・雑誌を読まない」理由として、非漢字圏の学生の多くは「漢字が難しいこと」をあげている。そういった学生にとって、DLを利用した読解は、「有能感」を高める効果があると推測される。事後調査では特に非漢字圏の日本語レベルの低い学生に「DLを使った読解は楽しい」「新聞が読めて嬉しい」といった記述が見られる。

またDLは自律的学習のツールであるから、「自己決定感」を高める効果も期待される。今回の調査で「日本語の教科書より興味のある素材を読みたい」と答える学生が事前調査より多くなっていることは、DLの利用によ

て「自分で読みたいものを選ぶことができる」状況を体験したことも関係していると考えられる。

DLの利用を通じた読解に関する態度変容については、サンプル数が少ないため、断定することはできないが、内発的動機を高め、学習者の自律性を促す効果があると推測することができる。

6 Dictionary Link System の利用を促進させるために

今回の調査によって、Dictionary Link System は、中級レベルから上級前半（日本語能力試験2級合格レベル程度まで）の非漢字圏出身の学生にとっては、自律的読解学習を行うために、有効な補助手段として利用できることがわかった。しかし、同時にいくつかの問題点も明らかになった。事後調査からは、DLを利用した学生もしなかった学生も、「自由に使えるコンピュータがない」ことをDLを利用しにくい理由として一番にあげている他、DLというシステム自体の限界を指摘する意見も見られた。そこでこれらの問題とその解決方法について考えてみたい。

1) コンピュータ環境の問題

学生が自由に利用できるコンピュータの台数が少ないためコンピュートールームと情報処理センターが常時混んでいる点、利用時間が制限されている点、及び、DLがインターネットを利用したツールであることに起因する問題として、インターネット回線が混んでいる時にはDLの処理スピードが遅い、自宅からアクセスするにはお金がかかるといった点が指摘されている。コンピュータの台数、施設の利用条件、インターネットの速度の問題についてはすぐに解決はできないが、自宅にコンピュータを持っている学生であれば、インターネットでダウンロードすることができる AutoGlossJ¹¹⁾のような辞書システムを使うことによって費用の問題は解決することができる。

2) 読解支援システムとしての限界

第1に、DLの生成する辞書は紙の辞書と同様、1語にいろいろな意味が示されている。そのため、どの意味にあたるのかを文脈の中で学習者自身が判断しなければならない。第2に、形態素解析に起因する問題として、1語を2語とみなしたり、その逆に解釈してしまうことがある。また、辞書自体の誤りもいくつか指摘されている。これについては、今後システム開発者と共に改良を考える必要がある。第3に、単語の意味がわかっても、文章全体の意味がわからない場合も多く、構文理解のてがかりがほしいという意見があった。

DLは翻訳を目的としたシステム、構文理解を助けるツールではなく、「語彙」のみに注目したシステムである。DLの「利用者は既習の知識を生かし、言語習得の手段として活用することが期待できる」(寺 1997)のであるが、日本語能力試験3級合格レベルの学生には文脈から言葉の意味を選択することは難しい場合がある。かなり日本語力が上の学習者でも、構文理解でつまづく場合もあるだろう。文章が理解できないという場合、語彙の難しさ、文の長さ、文型の難しさ、内容に関する背景的知識の欠如等の理由が想起されるが、DLが補うことができるのは「語彙」の部分だけである。他の部分に関しては、日本語教員、日本人チューター等によるサポートが必要となる。

7 DLの効果的導入方法

表5は筆者の担当する「経済の日本語」(16名)と筆者が実際にコンピュータを使ってDLの利用方法を教えた春の集中コースの「上級経済クラス」(2名)の学生と「中級・前」レベルの学生(3名)の合計21名とそれ以外の学生とで、DLの利用度が異なるかどうかを調べたものである。その結果筆者が直接関わった学生のほうがDLの利用度は高いことがわかった。

筆者が担当する「経済の日本語」では学期中に4回、新聞または雑誌の記事の要約を提出するという課題を出している。DLを利用するように特に強くはすすめていないが、DLを使って記事を読み、要約文を書いてきた学生

表5 紹介方法とDLの利用

紹介方法 DLを利用したか	筆者の担当 クラス等	それ以外	合計
利用した	13	5	18
利用しなかった	8	18	26
合計	21	23	44

$$\chi^2=7.33 \quad (p<0.01)$$

も2名（A：非漢字圏，女性，中級・後，B：漢字圏，女性，上級・前）いた。

Grow (1991) は，学習者が完全な自律学習に至る4段階のモデルをあげている。

- 第1段階：学習者は教師に依存している状態で，学習は教師を中心に進められる。新しい学習を始めるときにはどんな学習者も第1段階を経る。
- 第2段階：学習者は教師の指導のもとに，与えられた教材の範囲内である程度自らの興味にそった方向に進むようになるがそれ以上に進むことはできない。
- 第3段階：学習者は技術と知識を持っていて，積極的に学習に参加する。教師はファシリテータの役割を担うようになる。
- 第4段階：学習者は完全に自律的になり，自ら学習目標と評価基準を設定する。教師はコンサルタントの役割になる。

自律的学習態度が第1，第2段階の学生に対しては，DLを利用して何らかの課題を遂行させ，自律性が高まるのを促すことが効果的であろう。日本人チューターにDLを紹介し，単語の意味の選定や構文理解を助けてもらうといったことも有効な方法と考えられる。ここに，DLの特性を生かした自律学習プランの例をあげる。

第1段階：DLにリンクをはっている新聞社の記事を読む。

第2段階：ホームページの時事問題の討論などを紹介し，興味のあるものを選んで読ませる。

第3段階：学生自身興味のあるホームページ探してきて読解作業を行う。

ホームページあてに意見を送るところまで進める。

第4段階：学生の読みたい文章をスキャナーで読みこんでDLにのせたり、留学生、日本人学生を含めたメイリングリストを作り、何らかのテーマを選んで学生同士で議論を進める。

筆者が「漢字CAI」の授業(注5)参照)で試みているのは、「ひらがなタイムズ」のホームページ¹²⁾から「ひらタイ議会」の討論のページを読ませて、問題の背景を理解させたうえで、賛成か反対かの意見を書いて、ホームページに送らせる方法である。「自分の書いた日本語の文章がホームページにのる」ことを大変喜んで参加している学生が多い。「ひらがなタイムズ」の場合、英訳も見ることができるが、DLを使って漢字かなまじり文に挑戦している「中級・前」レベルの学生も見られる。「読む」だけに終わらず、「書く」という作業を結びつけること、特に自らの意見を他人に読んでもらえるということが学習の動機づけには非常に有効であると考えられる。

8 おわりに

日本語学習者の多様化に伴って、個々の学生のニーズに応じた、内容中心の日本語教育が求められていることは冒頭に述べた。一橋大学では教養教育の日本語授業の他に、経済学部で「経済の日本語」、社会学部で「社会・人文の日本語Ⅰ及びⅡ」を開講し、専門分野の語彙・文例を用いた日本語教育を行っている。それぞれの授業において使用しているテキスト¹³⁾は一部専門科目教官の協力を得て日本語教官が作成した。また、1998年3月の春の日本語集中コースにおいて「上級経済クラス」を設けた。講座修了時のアンケートでは、5名の受講生全員が「経済の内容に絞って素材をとりあげた授業で、非常に役にたった。再度受講したい」と感想を述べている。

ここに、さらに一步進んで、専門の学習を通じて言語を獲得していこうという発想がある。Brinton, Snow, Wescheが1989年にその著書『Content-

Based Second Language Instruction』で提案した方法が Content-Based Approach で、「特定のテーマあるいは教科科目がもつ内容＝情報・思想・知識が学習者に目標言語を使って教授される過程で、学習者が付随的に目標言語を習得する、ということがその理論の核心となっている」（塩川 1995）。この教授法の理論的基礎の一つは、目標言語の意味のある使用機会を学習者に与えることであり、学習内容を学習者の興味や必要と関連づけることで、言語習得を促進するという考え方である。5つの基本モデル（塩川 1995）¹⁴⁾があるが、いずれも言語教育の目標と教科教育の目標の統合を出発点とし、言語の習得が最終目標ではなく言語を medium of learning と捉えている点で共通している。

今後、留学生の多様化はますます進行していくことが予想される。日本語教育は専門の学習・研究の基礎として依然重要な役割を果たし続けることは間違いないが、短期間に専門の学習・研究成果をあげるための日本語教育を考えた場合、学習者のニーズを生かした自律的学習のデザイン、さらには、専門教育の中に日本語教育を組みこんでいくといった大胆なコースデザインも考慮されてよいだろう。

Dictionary Link System のホームページ

<http://www.jaist.ac.jp/~tera>

- 1) 現在 14 大学ある海外の学生交流協定校等から 1 年間の予定で留学してくる交換留学生
- 2) 日本語および日本文化を学ぶために、文部省の奨学金を得て 1 年間の予定で留学してくる学部レベルの留学生。
- 3) 留学生センターで半年間の日本語集中教育を受講した後、一橋大学または他の国立大学に配置される留学生
- 4) 「一橋大学における外国人留学生受け入れの現状と提言」（1993）学生国際交流委員会
- 5) 1996 年度までは教養教育科目として「CAI (Computer-Assisted Instruction)」クラス、1998 年度からは「漢字 CAI」のクラスを開講している。

- 6) 一橋大学では、中級レベルの漢字練習システムと初中級文法の練習システム(1997年度まで使用していたが新機種への移行に伴い現在は利用を停止している)を開発し、利用している。
- 7) 一橋大学の Mancuso (1997) は、WWW を利用した英語のライティング授業の実践を報告している。
- 8) パソコンルームに50台(開室9時~17時)と情報処理センターの共同利用室に14台、演習室に20台と、東分室に40台の部屋が2室。情報処理センターの開館時間は9時半から17時で、授業がある時期は夜間20時まで利用できる。
- 9) 学内の留学生を対象に3月と9月にそれぞれ合計約65~70時間の特別集中コースを実施している。
- 10) 学生は来学後、プレイスメントテストによって、5段階の日本語クラス分けられる。「上級・後」が最も上のレベルで「中級・前」が下のレベル。それぞれのレベルの日本語学習時間のめやすは資料2を参照のこと。学部正規留学生はプレイスメントテストを受けないので、本論で調査対象者のうち「日本語A」を受講している国費留学生は「上級・前」のレベル、「社会科学ゼミナール」を受講している私費留学生は「上級・後」のレベルとほぼ同等と見なして分類した。
- 11) アメリカのPurdue大学のサイト <http://www.sla.purdue.edu/fl/Japan-Proj/>でダウンロードできる。この辞書システムは、DLと異なりすべての単語に自動的に辞書をつけてはくれないが、自分のわからない単語を選んで辞書を作ることができる。
- 12) 「ひらがなタイムズ」は外国人向けに、漢字かなまじり文、ひらがな、英語で表記された月刊誌で、ホームページもこの3つの文字で公開している。
<http://www.gsquare.or.jp/HiraganaTimes/index.html>
- 13) 「経済の日本語」では『経済の語彙・表現』、「社会・人文の日本語I及びII」では『社会科学への道しるべ』を使用。いずれも学内のみで使用している。
- 14) (1) Immersion Program, (2) Language for Specific Purposes
(3) Theme-Based Instruction, (4) Sheltered Course,
(5) Adjunct Language Instruction

参考文献

- Brinton, D. M. & Snow, M. A. & Wesche, M. B. (1989) *Content-Based Second Language Instruction*, Newbury House
- Crandall, J. (1987) *ESL Through Content-Area Instruction*, Prentice Hall

- Grow, G. O. (1991) "Teaching learners to be self-directed," *Adult Education Quarterly*, Vol. 41, No. 3, pp. 125-149
- Levy, M. (1997) *Computer-Assisted Language Learning*, Oxford University Press
- Mancuso J. F. (1997) "Millennium Approaches Controlled Error Correction and Publication on the WWW," 『言語文化』 vol. 34, pp. 71-89
- Mohan, B. A. (1986) *Language and Content*, Addison-Wesley Publishing Company
- 池田伸子 (1997) 『CAIの特性と日本語教育におけるその教育的利用』「九州大学留学生センター紀要」第9号, pp. 85-94
- 市川伸一 (1994) 『コンピュータを教育に生かす』勁草書房
- 北村達也, 西谷まり他 (1998) 「読解支援システム CGI-DL が利用される条件」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 5, No. 1, pp. 10-11
- 桜井茂男 (1997) 『学習意欲の心理学』誠心書房
- 塩川春彦 (1995) 「Content-Based Approach」『現代英語教授法総覧』大修館書店, pp. 296-304
- 田中望, 斎藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実際』大修館書店
- 寺朱美 (1997) 「多読にもとづく漢字習得を支援するシステムの提案」『日本語学』Vol. 6, No. 6, pp. 101-108
- 寺朱美 (1988) 「日本語読解支援システム「DL」一検証結果の報告」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 5, No. 1, pp. 36-37
- 天満美智子 (1989) 『英文読解のストラテジー』大修館書店
- 一橋大学留学生センター (1997) 『一橋大学における交流学生の受け入れ一面接調査が示すその特徴と学生・教官の評価』一橋大学留学生センター
- 山内豊 (1996) 『インターネットを活用した英語授業』NTT 出版
(一橋大学専任講師)

資料1 日本語能力試験の認定基準

級	認定基準
4	初歩的な文法, 漢字100字程度, 語彙800語程度を習得. 学習時間150時間程度.
3	基本的な文法, 漢字300字程度, 語彙1,500語程度を習得. 学習時間300時間程度.
2	やや高度の文法, 漢字1,000字程度, 語彙6,000語程度を習得. 学習時間600時間程度.
1	高度の文法, 漢字2,000字程度, 語彙10,000語程度を習得. 学習時間900時間程度.

資料2 一橋大学日本語コースの受講のための前提条件

科目名	受講のための前提条件
日本語 中級・前	初中級レベルの基本的な文法, 漢字500, 語彙3,000語を学習していること (学習時間450時間以上)
日本語 中級・中	日本語能力試験2級合格280点レベル. 中級前期の文法, 漢字800, 語彙5,000語を学習していること (学習時間600時間以上)
日本語 中級・後	日本語能力試験2級合格330点レベル 中級中期の文法, 漢字1,000, 語彙7,000語を学習していること (学習時間750時間以上)
日本語 上級・前	日本語能力試験2級合格380点レベル. 中級後期の文法, 漢字1,200, 語彙9,000語を学習していること (学習時間900時間以上)
日本語 上級・後	日本語能力試験1級合格レベル. 全常用漢字, 語彙1万語を学習していること (学習時間1,000時間以上)